葱

芥川龍之介

おれは締切日を明日（みょうにち）に控えた今夜、一気呵成（かせい）にこの小説を書こうと思う。いや、書こうと思うのではない。書かなければならなくなってしまったのである。では何を書くかと云うと、——それは次の本文を読んで頂くよりほかに仕方はない。

神田（かんだ）神保町辺（じんぼうちょうへん）のあるカッフェに、お君（きみ）さんと云う女給仕がいる。年は十五とか十六とか云うが、見た所

はもっと大人（おとな）らしい。何しろ色が白くって、眼が涼しいから、鼻の先が少し上を向いていても、とにかく一通りの美人である。それが髪をまん中から割って、忘れな草の簪（かんざし）をさして、白いエプロンをかけて、自働ピアノの前に立っている所は、とんと竹久夢二（たけひさゆめじ）君の画中の人物が抜け出したようだ。——とか何とか云う理由から、このカッフェの定連（じょうれん）の間には、夙（つと）に通俗小説と云う渾名（あだな）が出来ているらしい。もっとも渾名（あだな）にはまだいろいろある。簪の花が花だから、わすれな草。活動写真に出る亜米利加（アメリカ）の女優に似ているから、ミス・メリイ・ピックフォオド。このカッフェに欠くべから

ざるものだから、角砂糖。ETC. ETC.

この店にはお君さんのほかにも、もう一人年上の女給仕がある。これはお松（まつ）さんと云って、器量（きりょう）は到底お君さんの敵ではない。まず白麺麭（パン）と黒麺麭ほどの相違がある。だから一つカッフェに勤めていても、お君さんとお松さんとでは、祝儀の収入が非常に違う。お松さんは勿論、この収入の差に平（たいら）かなるを得ない。その不平が高（こう）じた所から、邪推もこの頃廻すようになっている。

ある夏の午後、お松さんの持ち場の卓子（テエブル）にいた外国語学校の生徒らしいのが、巻煙草（まきたばこ）を一本啣（くわ）えながら、

燐寸（マッチ）の火をその先へ移そうとした。所が生憎（あいにく）その隣の卓子（テエブル）では、煽風機（せんぷうき）が勢いよく廻っているものだから、燐寸の火はそこまで届かない内に、いつも風に消されてしまう。そこでその卓子（テエブル）の側を通りかかったお君さんは、しばらくの間（あいだ）風をふせぐために、客と煽風機との間へ足を止（と）めた。その暇に巻煙草へ火を移した学生が、日に焼けた頬（ほお）へ微笑を浮べながら、「難有（ありがと）う」と云った所を見ると、お君さんのこの親切が先方にも通じたのは勿論である。すると帳場の前へ立っていたお松さんが、ちょうどそこへ持って行く筈の、アイスクリイムの皿を取り上げると、お君さんの顔をじろりと見て、

「あなた持っていらっしゃいよ。」と、嬌嗔（きょうしん）を発したらしい声を出した。——

こんな葛藤（かっとう）が一週間に何度もある。従ってお君さんは、滅多にお松さんとは口をきかない。いつも自働ピアノの前に立っては、場所がらだけに多い学生の客に、無言の愛嬌（あいきょう）を売っている。あるいは業腹（ごうはら）らしいお松さんに無言ののろけを買わせている。

が、お君さんとお松さんとの仲が悪いのは、何もお松さんが嫉妬（しっと）をするせいばかりではない。お君さんも内心、お松さんの趣味の低いのを軽蔑している。あれは全く尋常小学を出てから、浪花節（なにわぶし）を聴いたり、蜜豆（みつまめ）

を食べたり、男を追っかけたりばかりしていた、そのせいに違いない。こうお君さんは確信している。ではそのお君さんの趣味というのが、どんな種類のものかと思ったら、しばらくこの賑（にぎや）かなカッフェを去って、近所の露路（ろじ）の奥にある、ある女髪結（おんなかみゆい）の二階を覗（のぞ）いて見るが好い。何故（なぜ）と云えばお君さんは、その女髪結の二階に間借をして、カッフェへ勤めている間のほかは、始終そこに起臥（おきふし）しているからである。

　二階は天井の低い六畳で、西日（にしび）のさす窓から外を見ても、瓦屋根のほかは何も見えない。その窓際の壁へよせて、更紗（さらさ）の布（ぬの）をかけた机がある。もっともこれは

便宜上、仮に机と呼んで置くが、実は古色を帯びた茶ぶ台に過ぎない。その茶ぶ——机の上には、これも余り新しくない西洋綴の書物が並んでいる。「不如帰」「藤村詩集」「松井須磨子の一生」「新朝顔日記」「カルメン」「高い山から谷底見れば」——あとは婦人雑誌が七八冊あるばかりで、残念ながらおれの小説集などは、唯一の一冊も見当らない。それからその机の側にある、とうにニスの剥げた茶箪笥の上には、頸の細い硝子の花立てがあって、花びらの一つとれた造花の百合が、手際よくその中にさしてある。察する所この百合は、花びらさえまだ無事でいたら、今でもあのカッフェの

卓子（テエブル）に飾られていたのに相違あるまい。最後にその茶簞笥の上の壁には、いずれも雑誌の口絵らしいのが、ピンで三四枚とめてある。一番まん中なのは、鏑木清方（かぶらぎきよかた）君の元禄女（げんろくおんな）で、その下に小さくなっているのは、ラファエルのマドンナか何からしい。と思うとその元禄女の上には、北村四海（きたむらしかい）君の彫刻の女が御隣に控えたベエトオフェンへ滴（したた）るごとき秋波（しゅうは）を送っている。但しこのベエトオフェンは、ただお君さんがベエトオフェンだと思っているだけで、実は亜米利加（アメリカ）の大統領ウッドロオ・ウイルソンなのだから、北村四海君に対しても、何とも御気の毒の至（いたり）に堪えない。――

こう云えばお君さんの趣味生活が、いかに芸術的色彩に富んでいるか、問わずしてすでに明かであろうと思う。また実際お君さんは、毎晩遅くカッフェから帰って来ると、必ずこのベエトオフェン alias ウイルソンの肖像の下に、「不如帰（ほととぎす）」を読んだり、造花の百合（ゆり）を眺めたりしながら、新派悲劇の活動写真の月夜の場面よりもサンティマンタアルな、芸術的感激に耽（ふけ）るのである。

桜頃（さくらごろ）のある夜、お君さんはひとり机に向って、ほとんど一番鶏（いちばんどり）が啼く頃まで、桃色をしたレタア・ペエパアにせっせとペンを走らせ続けた。が、その書き上げ

た手紙の一枚が、机の下に落ちていた事は、朝になってカッフェへ出て行った後(のち)も、ついにお君さんには気がつかなかったらしい。すると窓から流れこんだ春風(はるかぜ)が、その一枚のレタア・ペエパアを飜(ひるがえ)して、鬱金木綿(うこんもめん)の蔽(おお)いをかけた鏡が二つ並んでいる梯子段(はしごだん)の下まで吹き落してしまった。下にいる女髪結は、頻々(ひんぴん)としてお君さんの手に落ちる艶書(えんしょ)のある事を心得ている。だからこの桃色をした紙も、恐らくはその一枚だろうと思って、好奇心からわざわざ眼を通して見た。すると意外にもこれは、お君さんの手蹟(しゅせき)らしい。ではお君さんが誰かの艶書に返事を認(したた)めたのかと思うと、

「武男さんに御別れなすった時の事を考えると、私は涙で胸が張り裂けるようでございます」と書いてある。果然お君さんはほとんど徹夜をして、浪子夫人に与うべき慰問の手紙を作ったのであった。——

おれはこの挿話を書きながら、お君さんのサンティマンタリスムに微笑を禁じ得ないのは事実である。が、おれの微笑の中には、寸毫も悪意は含まれていない。お君さんのいる二階には、造花の百合や、「藤村詩集」や、ラファエルのマドンナの写真のほかにも、自炊生活に必要な、台所道具が並んでいる。その台所道具の象徴する、世智辛い東京の実生活は、何度今日までに

お君さんへ迫害を加えたか知れなかった。が、落莫(らくばく)たる人生も、涙の靄(もや)を透(とお)して見る時は、美しい世界を展開する。お君さんはその実生活の迫害を逃(のが)れるために、この芸術的感激の涙の中へ身を隠した。そこには一月六円の間代(まだい)もなければ、一升七十銭の米代もない。カルメンは電燈代の心配もなく、気楽にカスタネットを鳴らしている。浪子夫人も苦労はするが、薬代の工面(くめん)が出来ない次第ではない。一言にして云えばこの涙は、人間苦の黄昏(たそがれ)のおぼろめく中に、人間愛の燈火をつつましやかにともしてくれる。ああ、東京の町の音も全くどこかへ消えてしまう真夜中、涙に濡れた眼を挙げ

ながら、うす暗い十燭の電燈の下に、たった一人逗子の海風とコルドヴァの杏竹桃とを夢みている、お君さんの姿を想像——畜生、悪意がない所か、うっかりしているとおれまでも、サンティマンタアルになり兼ねないぞ。元来世間の批評家には情味がないと言われている、すこぶる理智的なおれなのだが。

　そのお君さんがある冬の夜、遅くなってカッフェから帰って来ると、始は例のごとく机に向って、「松井須磨子の一生」か何か読んでいたが、まだ一頁と行かない内に、どう云う訳かその書物にたちまち愛想をつかしたごとく、邪慳に畳の上へ抛り出してし

まった。と思うと今度は横坐り（よこずわ）に坐ったまま、机の上に頬杖（ほおづえ）をついて、壁の上のウイル——ベエトオフェンの肖像を冷淡にぼんやり眺め出した。これは勿論唯事ではない。お君さんはあのカッフェを解傭（かいよう）される事になったのであろうか。さもなければお松さんのいじめ方が一層悪辣（あくらつ）になったのであろうか。あるいはまたさもなければ齲歯（むしば）でも痛み出して来たのであろうか。いや、お君さんの心を支配しているのは、そう云う俗臭を帯びた事件ではない。お君さんは浪子夫人のごとく、あるいはまた松井須磨子のごとく、恋愛に苦しんでいるのである。ではお君さんは誰に心を寄せているかと

云うと――幸お君さんは壁の上のベエトオフェンを眺めたまま、しばらくは身動きもしそうはないから、その間におれは大急ぎで、ちょいとこの光栄ある恋愛の相手を紹介しよう。

お君さんの相手は田中君と云って、無名の――まぁ芸術家である。何故かと云うと田中君は、詩も作る、ヴァイオリンも弾く、油絵の具も使う、役者も勤める、歌骨牌も巧い、薩摩琵琶も出来ると云う才人だから、どれが本職でどれが道楽だか、鑑定の出来るものは一人もいない。従ってまた人物も、顔は役者のごとくのっぺりしていて、髪は油絵の具のごとくてらてらし

ていて、声はヴァイオリンのごとく優しくって、言葉は詩のごとく気が利（き）いていて、女を口説（くど）く事は歌骨牌をとるごとく敏捷で、金を借り倒す事は薩摩琵琶をうたうごとく勇壮活潑を極めている。それが黒い鍔広（つばびろ）の帽子をかぶって、安物（やすもの）らしい猟服（りょうふく）を着用して、葡萄色（ぶどういろ）のボヘミアン・ネクタイを結んで——と云えば大抵（たいてい）わかりそうなものだ。思うにこの田中君のごときはすでに一種のタイプなのだから、神田本郷（かんだほんごう）辺のバアやカッフェ、青年会館や音楽学校の音楽会（但し一番の安い切符の席に限るが）兜屋（かぶとや）や三会（さんかい）堂の展覧会などへ行くと、必ず二三人はこの連中が、傲然（ごうぜん）と俗衆を睥睨（へいげい）して

いる。だからこの上明瞭な田中君の肖像が欲しければ、そう云う場所へ行って見るが好い。おれが書くのはもう真平御免だ。第一おれが田中君の紹介の労を執っている間に、お君さんはいつか立上って、障子を開けた窓の外の寒い月夜を眺めているのだから。

瓦屋根の上の月の光は、頸の細い硝子の花立てにさした造花の百合を照らしている。壁に貼ったラファエルの小さなマドンナを照らしている。そうしてまたお君さんの上を向いた鼻を照らしている。が、お君さんの涼しい眼には、月の光も映っていない。霜の下りたらしい瓦屋根も、存在しないのと同じ事である。田中

君は今夜カッフェから、お君さんをここまで送って来た。そうして明日（あす）の晩は二人で、楽しく暮そうと云う約束までした。明日はちょうど一月に一度あるお君さんの休日（やすみび）だから、午後六時に小川町（おがわまち）の電車停留場で落合って、それから芝浦（しばうら）にかかっている伊太利人（イタリイじん）のサアカスを見に行こうと云うのである。お君さんは今日（きょう）までに、未嘗（いまだかつて）男と二人で遊びに出かけた覚えなどはない。だから明日の晩田中君と、世間の恋人同士のように、つれ立って夜の曲馬（きょくば）を見に行く事を考えると、今更のように心臓の鼓動（こどう）が高くなって来る。お君さんにとって田中君は、宝窟（ほうくつ）の扉を開くべき秘密の呪文（じゅもん）を心

得ているアリ・ババとさらに違いはない。その呪文が唱えられた時、いかなる未知の歓楽境がお君さんの前に出現するか。――さっきから月を眺めて月を眺めないお君さんが、風に煽(あお)られた海のごとく、あるいはまた将(まさ)に走らんとする乗合自動車のモオタアのごとく、轟く胸の中に描いているのは、実にこの来るべき不可思議(ふかしぎ)の世界の幻であった。そこには薔薇(ばら)の花の咲き乱れた路(みち)に、養殖真珠の指環(ゆびわ)だの翡翠(ひすい)まがいの帯止めだのが、数限りもなく散乱している。夜鶯(ナイチンゲエル)の優しい声も、すでに三越(みつこし)の旗の上から、蜜を滴(したた)すように聞え始めた。橄欖(かんらん)の花の匂(にお)いの中に大理石を畳んだ

宮殿では、今やミスタア・ダグラス・フェアバンクスと森律子嬢との舞踏が、いよいよ佳境に入ろうとしているらしい。……

が、おれはお君さんの名誉のためにつけ加える。その時お君さんの描いた幻の中には、時々暗い雲の影が、一切の幸福を脅すように、底気味悪く去来していた。成程お君さんは田中君を恋しているのに違いない。しかしその田中君は、実はお君さんの芸術的感激が円光を頂かせた田中君である。詩も作る、ヴァイオリンも弾く、油絵の具も使う、役者も勤める、歌骨牌も巧い、薩摩琵琶も出来るサア・ランスロットである。だ

からお君さんの中にある処女（しょじょ）の新鮮な直観性は、どうかするとこのランスロットのすこぶる怪しげな正体を感ずる事がないでもない。暗い不安の雲の影は、こう云う時にお君さんの幻の中を通りすぎる。が、遺憾ながらその雲の影は、現れるが早いか消えてしまう。お君さんはいくら大人（おとな）じみていても、十六とか十七とか云う少女である。しかも芸術的感激に充ち満ちている少女である。着物を雨で濡らす心配があるか、ライン河の入日の画端書（えはがき）に感嘆の声を洩（も）らす時のほかは、滅多（めった）に雲の影などへ心を止（と）めないのも不思議ではない。いわんや今は薔薇（ばら）の花の咲き乱れている路に、養殖真

珠の指環だの翡翠まがいの帯止めだのが——以下は前に書いた通りだから、そこを読み返して頂きたい。

お君さんは長い間、シャヴァンヌの聖（サン）・ジュヌヴィエヴのごとく、月の光に照らされた瓦屋根を眺めて立っていたが、やがて嚔（くさめ）を一つすると、窓の障子をばたりとしめて、また元の机の際（きわ）へ横坐りに坐ってしまった。それから翌日の午後六時までお君さんが何をしていたか、その間の詳しい消息（しょうそく）は、残念ながらおれも知っていない。何故（なぜ）作者たるおれが知っていないのかと云うと——正直に云ってしまえ。おれは今夜中にこの小説を書き上げなければならないからである。

翌日の午後六時、お君さんは怪しげな紫紺（しこん）の御召（おめし）のコオトの上にクリイム色の肩掛をして、いつもよりはそわそわと、もう夕暗に包まれた小川町の電車停留場へ行った。行くとすでに田中君は、例のごとく鍔広（つばびろ）の黒い帽子を目深（まぶか）くかぶって、洋銀の握りのついた細い杖をかいこみながら、縞の荒い半オオヴァの襟を立てて、赤い電燈のともった下に、ちゃんと佇（たたず）んで待っている。色の白い顔がいつもより一層また磨きがかかって、かすかに香水の匂（におい）までさせている容子（ようす）では、今夜は格別身じまいに注意を払っているらしい。

「御待たせして？」

お君さんは田中君の顔を見上げると、息のはずんでいるような声を出した。

「なあに。」

田中君は大様（おおよう）な返事をしながら、何とも判然しない微笑を含んだ眼で、じっとお君さんの顔を眺めた。それから急に身ぶるいを一つして、

「歩こう、少し。」

とつけ加えた。いや、つけ加えたばかりではない。田中君はもうその時には、アアク燈に照らされた人通りの多い往来を、須田町（すだちょう）の方へ向って歩き出した。サアカスがあるのは芝浦（しばうら）である。歩くにしてもここからは、

神田橋（かんだばし）の方へ向って行かなければならない。お君さんはまだ立止ったまま、埃風（ほこりかぜ）に飜（ひるがえ）るクリイム色の肩掛へ手をやって、

「そっち？」

と不思議そうに声をかけた。が、田中君は肩越しに、

「ああ。」

と軽く答えたぎり、依然として須田町の方へ歩いて行く。そこでお君さんもほかに仕方がないから、すぐに田中君へ追いつくと、葉を振（ふる）った柳の並樹（なみき）の下を一しょにいそいそと歩き出した。するとまた田中君は、あの何とも判然しない微笑を眼の中に漂わせて、お君

さんの横顔を窺いながら、

「お君さんには御気の毒だけれどもね、芝浦のサアカスは、もう昨夜でおしまいなんだそうだ。だから今夜は僕の知っている家へ行って、一しょに御飯でも食べようじゃないか。」

「そう、私どっちでも好いわ。」

お君さんは田中君の手が、そっと自分の手を捕えたのを感じながら、希望と恐怖とにふるえている、かすかな声でこう云った。と同時にまたお君さんの眼にはまるで「不如帰」を読んだ時のような、感動の涙が浮んできた。この感動の涙を透して見た、小川町、淡路町、

須田町の往来が、いかに美しかったかは問うを待たない。歳暮(せいぼ)大売出しの楽隊の音、目まぐるしい仁丹(じんたん)の広告電燈、クリスマスを祝う杉の葉の飾(かざり)、蜘蛛手(くもで)に張った万国国旗、飾窓(かざりまど)の中のサンタ・クロス、露店に並んだ絵葉書(えはがき)や日暦(ひごよみ)――すべてのものがお君さんの眼には、壮大な恋愛の歓喜をうたいながら、世界のはてまでも燦(きら)びやかに続いているかと思われる。今夜に限って天上の星の光も冷たくない。時々吹きつける埃風(ほこりかぜ)も、コオトの裾を巻くかと思うと、たちまち春が返ったような暖い空気に変ってしまう。幸福、幸福、幸福……

その内にふとお君さんが気がつくと、二人(ふたり)はいつか

横町（よこちょう）を曲ったと見えて、路幅の狭い町を歩いている。そうしてその町の右側に、一軒の小さな八百屋（やおや）があって、明（あかる）く瓦斯（ガス）の燃えた下に、大根、人参（にんじん）、漬（つ）け菜（な）、葱（ねぎ）、小蕪（こかぶ）、慈姑（くわい）、牛蒡（ごぼう）、八（や）つ頭（がしら）、小松菜（こまつな）、独活（うど）、蓮根（れんこん）、里芋、林檎（りんご）、蜜柑の類が堆（うずたか）く店に積み上げてある。その八百屋の前を通った時、お君さんの視線は何かの拍子（ひょうし）に、葱の山の中に立っている、竹に燭奴（つけぎ）を挟んだ札（ふだ）の上へ落ちた。札には墨黒々（すみくろぐろ）と下手（へた）な字で、「一束（ひとたば）四銭（よんせん）」と書いてある。あらゆる物価が暴騰した今日（こんにち）、一束四銭と云う葱は滅多にない。この至廉（しれん）な札を眺めると共に、今まで恋愛と芸術とに酔っていた、お君さ

んの幸福な心の中には、そこに潜んでいた実生活が、突如としてその惰眠から覚めた。間髪(かんはつ)を入れずとは正にこの謂(いい)である。薔薇(ばら)と指環と夜鶯(ナイチンゲエル)と三越(みつこし)の旗とは、刹那に眼底を払って消えてしまった。その代り間代(まだい)、米代、電燈代、炭代、肴代(さかなだい)、醬油代、新聞代、化粧代、電車賃――そのほかありとあらゆる生活費が、過去の苦しい経験と一しょに、恰(あたか)も火取虫の火に集るごとく、お君さんの小さな胸の中に、四方八方から群(むらが)って来る。お君さんは思わずその八百屋の前へ足を止めた。それから呆気(あっけ)にとられている田中君を一人後に残して、鮮(あざやか)な瓦斯(ガス)の光を浴びた青物の中へ足を

入れた。しかもついにはその華奢（きゃしゃ）な指を伸べて、一束四銭の札が立っている葱の山を指さすと、「さすらい」の歌でもうたうような声で、

「あれを二束（ふたたば）下さいな。」と云った。

　埃風（ほこりかぜ）の吹く往来には、黒い鍔広（つばびろ）の帽子（ぼうし）をかぶって、縞（しま）の荒い半オオヴァの襟を立てた田中君が、洋銀の握りのある細い杖をかいこみながら、孤影悄然（しょうぜん）として立っている。田中君の想像には、さっきからこの町のはずれにある、格子戸造（こうしどづくり）の家が浮んでいた。軒に松（まつ）の家（や）と云う電燈の出た、沓脱（くつぬ）ぎの石が濡れている、安普請（やすぶしん）らしい二階家である、が、こうした往来に立っ

ていると、その小ぢんまりした二階家の影が、妙にだんだん薄くなってしまう。そうしてその後(あと)には徐(おもむろ)に一束四銭の札(ふだ)を打った葱(ねぎ)の山が浮んで来る。と思うとたちまち想像が破れて、一陣の埃風(ほこりかぜ)が過ぎると共に、実生活のごとく辛辣(しんらつ)な、眼に滲(し)むごとき葱の匂(におい)が実際田中君の鼻を打った。

「御待ち遠さま。」

　憐むべき田中君は、世にも情無(なさけな)い眼つきをして、まるで別人でも見るように、じろじろお君さんの顔を眺めた。髪を綺麗にまん中から割って、忘れな草の簪(かんざし)をさした、鼻の少し上を向いているお君さんは、クリ

イム色の肩掛をちょいと顋（あご）でおさえたまま、片手に二束八銭の葱を下げて立っている。あの涼しい眼の中に嬉しそうな微笑を躍らせながら。

とうとうどうにか書き上げたぞ。もう夜が明けるのも間はあるまい。外では寒そうな鶏（にわとり）の声がしているが、折角（せっかく）これを書き上げても、いやに気のふさぐのはどうしたものだ。お君さんはその晩何事もなく、また

あの女髪結(おんなかみゆい)の二階へ帰って来たが、カッフェの女給仕をやめない限り、その後(ご)も田中君と二人で遊びに出る事がないとは云えまい。その時の事を考えると、——いや、その時はまたその時の事だ。おれが今いくら心配した所で、どうにもなる訳のものではない。まあこのままでペンを擱(お)こう。左様(さよう)なら。お君さん。では今夜もあの晩のように、ここからいそいそ出て行って、勇ましく——批評家に退治(たいじ)されて来給え。

（大正八年十二月十一日）

底本：「芥川龍之介全集３」ちくま文庫、筑摩書房
　　１９８６（昭和61）年12月１日第１刷発行
　　１９９６（平成８）年４月１日第８刷発行
底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房
　　１９７１（昭和46）年３月～１９７１（昭和46）年11月
入力：j.utiyama
校正：かとうかおり
１９９８年12月８日公開
２００４年３月12日修正